九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡方言のとりたて詞「ヤラ」「ゲナ」の成立をめぐって

松尾, 弘徳
鹿児島国際大学国際文化学部 : 講師

https://doi.org/10.15017/1445863

出版情報：文獻探究. 51, pp.19-29, 2013-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

福岡方言のとりたて詞「ヤラ」「ゲナ」の成立をめぐって

松尾　弘徳

はじめに

福岡方言では、否定的特立をあらわす際に用いられるとりたて詞にヤラとゲナというものがある。

ヤラは老年層に、ゲナは若年層においてもっぱら使用されるのであるが、両者の相違点は使用年層のみではない。本稿の目的は、この２つのとりたて詞ヤラとゲナの意味用法の相違がなぜ生じたのかを明らかにすることである。とくに両者の成立過程に着目しつつ考察をすすめたい。

なお、本稿のねらいは、あるとりたて詞のもつ意味用法がとりたて詞として成立する前段階の用法と深く関わっていることを明らかにすることにあり、当該地域に存するよく似た二つの形式の相違点の記述にとどまるわけではないことも強調しておきたい。

1. 福岡方言における「～なんか嫌いだ」の言い方に関する報告

本稿が考察の対象とする表現は、「数学なんか嫌いだ」のように、あるものを否定的にとりたてる際の言い方である。本稿では、以下これを「否定的特立」と呼ぶ[1]。否定的特立はあるものごとを否定的な意味で強調する用法であるため、述部には「嫌いだ」「好きではない」などのような好ましくないことを示す形容詞類や否定表現を伴うことが多い。共通語では(1)のように「ナンカ」「ナンテ」「トカ」などが否定的特立をあらわすとりたて詞として使用される。

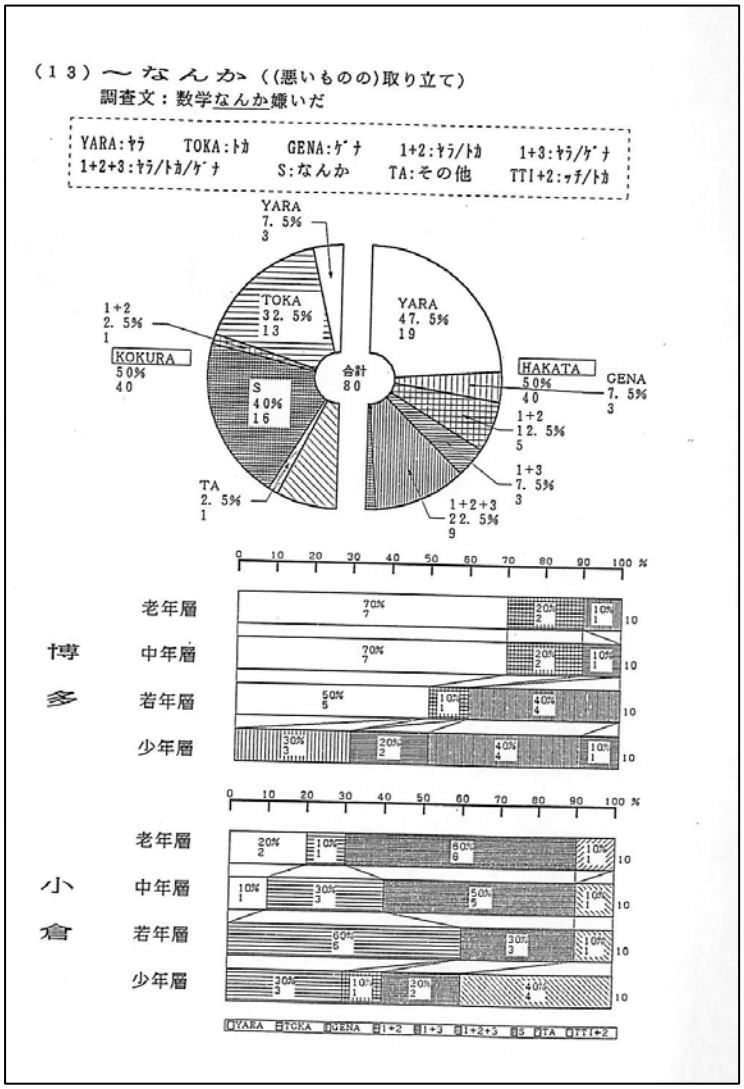
(1)　公式など覚えなければならないことが多すぎて、数学｛ナンカ／ナンテ／トカ｝嫌いだ。

さて、福岡方言において、否定的特立としてどのようなとりたて詞が用いられるのかについては、やや以前のものではあるがすでに次の報告がある。

陣内正敬(1993)『地方中核都市方言調査報告－福岡市・北九州市－』（1992 年 7～8 月調査）

ここでは、福岡市周辺域の様相に焦点を絞って論じることとする。そのため、上のデータにおいても考察対象とするのは福岡市のものであり、本稿では北九州市など他地域の様相はいったん措くこととする。

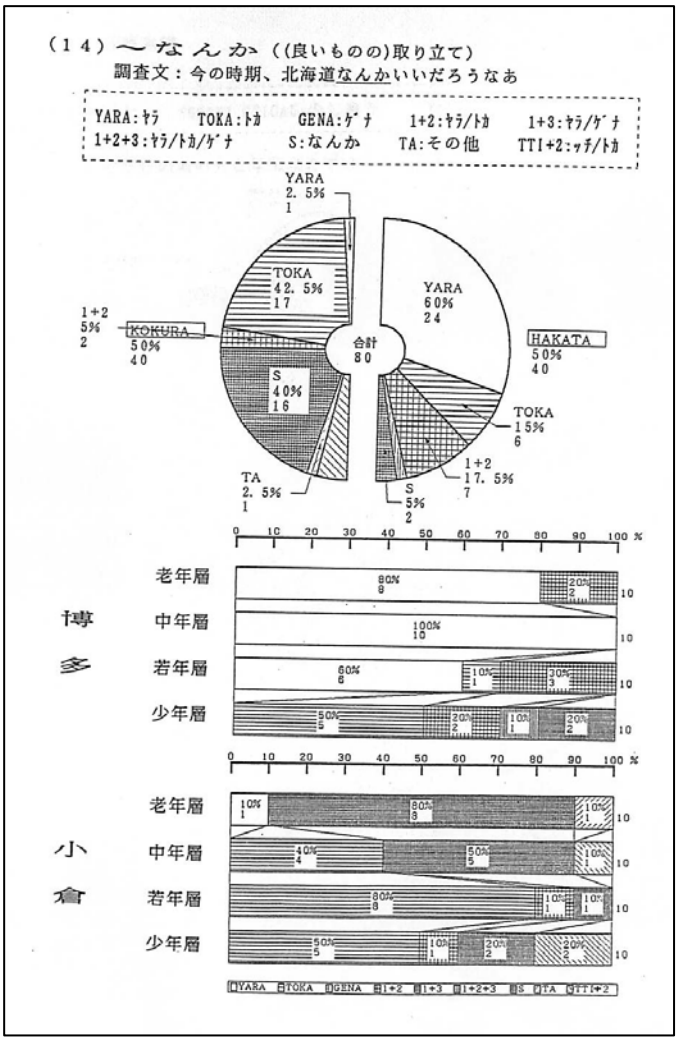
まずは、この陣内(1993)の「数学なんか嫌いだ」（項目(13)　悪いものの取り立て〔本稿の否定的特立にあたる・稿者注〕）のデータを次ページにそのまま引用する。



（陣内(1993)p.119）

データは博多と小倉の二つの表の組み合わせからなっているが、ここでは福岡市周辺域にあたる博多のデータのみに着目してほしい。このデータからわかるのは、否定的特立をあらわす場合に福岡市周辺域の老年層・中年層がヤラを用いるのに対して、少年層はもっぱらゲナを用いるということである。このようにゲナとヤラには使用する年層の相違を見て取ることができるのである。なお、陣内(1993)では若年層においてもそれなりにヤラが使われているが、稿者が 2007 年におこなった調査では 18～25 才の若年層におけるゲナ使用率がさらに上がっており、時間の経過とともに否定的特立をあらわすとりたて詞ゲナが若年層にも広く浸透していることがうかがえる[2]。

そしてもうひとつ興味深い事実がある。陣内(1993)が明らかにしているように、「今の時期、北海道なんかいいだろうなあ」（項目(14)　良いものの取り立て）については、博多のどの年層においてもゲナは用いられないのに対し、ヤラは少年層以外の老年層、中年層、若年層の各年層においてその使用が認められるのである（次ページ参照）。



（陣内(1993)p.120）

つまり、福岡方言話者の使うヤラはとりたてるものの評価性は特に問わず、肯定的にも否定的にも前の要素をとりたてることができるということである。とすると、福岡方言におけるとりたて詞ヤラの機能を否定的特立とするのは妥当ではなく、いくつかあるものうちから一つを具体例としてあげるという、「擬似的例示」の機能とみるべきであることがわかる[3]。

以上、これまでの先行研究から見えてくることをまとめると(2)のようになる。

(2)　福岡方言における「ヤラ」と「ゲナ」の特徴

	とりたてのタイプ	使用層
ヤラ	擬似的例示	主に中年層以上が使用する伝統的方言形
ゲナ	否定的特立	主に若年層以下が使用する「新方言」

さて先行研究における方言調査や稿者が独自におこなったアンケート調査からとりたて詞ヤラおよびゲナの意味用法が見えてきたのであるが、いっぽうで次の２点が疑問として残る。

① ヤラという形式は共通語にも見られる。では、福岡方言のおもに老・中年層話者が用いるヤラは、共通語のヤラと比較した時にどのような特徴があるのだろうか。

② ゲナという形式は現代の共通語には見られないものである。しかも、共通語で否定的特立用法として用いられるナンカ、ナド、トカはかならずしも否定的特立専用というわけではない[4]。福岡方言のゲナはなぜとりたて詞が持つ意味用法のうち否定的特立に特化して用いられるのだろうか。

以上の疑問を解決するために、第２節では上の①について、そして続く第３節では②について考察を加えてみたいと思う。

2. とりたてヤラの用法とその成立過程

2. 1. 共通語のヤラと福岡方言のヤラ

ヤラというとりたて詞は共通語にも見られる。しかしながら、その意味用法は福岡方言におけるそれとは相違点がある。まず、この点について確認しておきたい。

共通語のヤラは２つ以上のものを述べ立てる時に用いられる、並列用法を持つ。このことは、グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』の次の記述からもうかがえる。

(3) a. 来月はレポートやら試験やらでひどく忙しくなりそうだ。
b. スケート場は子供やらつきそいの母親やらでごったがえしていた。

(4) 「…や…などいろいろ」「…たり…たりして」のようにいくつかの中から並べあげるのに用いる。「いろいろあって大変だ」という意味で使われることが多い。

（(3)(4)ともにグループ・ジャマシイ編(1998) p.606 より引用）

上の(3a)では「レポート」と「試験」を、(3b)では「子供」と「つきそいの母親」をそれぞれ並列して述べ立てる際にヤラが後接している。つまり、共通語のヤラは、(5)のような一つのものだけを例として挙げるような場合には用いられないということになる。

(5) a. *来月は試験ヤラでひどく忙しくなりそうだ。
b. *スケート場はつきそいの母親ヤラでごったがえしていた。

それに対して福岡方言のヤラは、「数学ヤラ嫌いだ」「今の時期、北海道ヤラいいだろうなあ」のように２つ以上のものを並列させる必要はなく、「A ヤラ－［述語］」という構文で使用可能である。共通語ヤラが「A ヤラ B ヤラ－［述語］」という構文で用いられることとは対照的である。

2.2. 並列起源タイプのとりたて詞

では、福岡方言のヤラと共通語のヤラとの関係はいかなるものなのであろうか。この点を考えるにあたっては、そのほかの並列形式を視野に入れてみるとわかりやすい。共通語のナリ、タリ、トカはいくつかある集合の中から一つのものを具体的に例示する擬似的例示用法をもつ。

(6) a. 何か飲み物ナリ持ってきましょう。
b. 春休み中は、旅行に行っタリしました。
c. おみやげには、ご当地キティちゃんトカいいんじゃない？

このような用法に加え、ナリ、タリ、トカには複数のものを並列して述べ立てる並列用法もある。

(7) a. 喉が渇いたのでしたらお茶ナリ水ナリお持ちしますよ。
b. 春休み中は旅行に行っタリ実家に帰省しタリしました。
c. 旅行に行くんだったら、その土地のお酒トカ銘菓トカ買ってきてちょうだい。

このような並列形式の成立過程に関しては、岩田美穂氏による一連の詳細な研究がある。たとえば、岩田(2007a)はナリとタリの歴史的変遷を考察しているのであるが、これによるとナリは江戸期ごろに、そしてタリは室町期ごろに並列形式としての機能を持つようになったとされる。

(8)は、岩田(2007a)に挙げられた並列形式と思しき早い時期の例である。

(8) a. 其の上では手前の働で、一年なり半年なり、傳兵衛どのを育まにやアならねえ
（人情本・恋の花染）
b. 已ニ官ニ居テ公家カラ俸禄ヲ取ル者ガ田ヲ作タリアキナイヲシタリナンドスルハ民ト利ヲ争ナリ （史記抄･十四）

ナリ、タリ、そしてトカは、このような並列用法がまず先行して成立し、それに遅れて(6)のような擬似的例示用法が成立したと考えられる。そのことを確認するために、『日本国語大辞典　第二版』（小学館）でそれぞれの項目に挙げられた各用法の初出例を比べてみよう。

(9) 『日本国語大辞典　第二版』の挙げる各用法の初出例

	並列用法の初出例	擬似的例示用法の初出例
ナリ	人情本･春色雪の梅（1838-42 頃か）	浜菊〔伊藤左千夫〕（1908）
タリ	平家物語（13C 前）	史記抄（1477）
トカ	寛永刊本蒙求抄（1529 頃）	ロザリオの経（1622 年版）

このように、いずれにおいても擬似的例示用法に先行して並列用法が見られることが確認できるのである。

ここからの帰結として、ナリ、タリ、トカはもと並列用法であったものが擬似的例示用法としても用いられるようになるという史的変遷をたどったものと考えられる。変化の内実としては、複数のものを並べ立てる並列用法から、一つのものだけを例示することでそのほかに同じ集合のものがあることを含意する擬似的例示用法が派生したということである。

そして、福岡方言のヤラにはこれと同じような変化が生じたのではないだろうか。共通語においては生じていない文法変化が、福岡方言において生じたということである。他の並列形式に生じた変化と同じ方向の変化が並列形式ヤラに生じたと考えることで、福岡方言のヤラがもつ意味用法の説明ができることになる。

なお、国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図１』図 54「傘なんかいらない」によると、四国や関西の一部にもヤラ系の形式が見えることから、他地域においてもヤラに同じような方向の変化が生じている可能性があることを申し添えておきたい。

以上、ここでは、福岡方言に見られる「数学ヤラ嫌いだ。」「旅行するんだったら、今の時期、北海道ヤラいいだろうなあ。」といったヤラの用法が、並列形式から派生した可能性が高いことを述べた。

3. とりたてゲナの用法とその成立過程

3. 1. とりたて詞としての「ゲナ」の用法

次に、福岡方言のゲナについて考えてみたい。ゲナはその形式自体が現代共通語においては用いられることのないものである。

このゲナは福岡方言の老年層話者においては(10)のような伝聞形式として用いられる。

(10) a. そこの家で赤ん坊が生まれたゲナ。（生まれたそうだ）
b. 明日から新しい先生が来るゲナ。（来るそうだ）

ところが、稿者が 2007 年におこなったアンケート調査によると、若年層以下の年層の福岡方言話者においては伝聞用法としてのゲナはほとんど見られないことがわかった[5]。

それに対し、当該地域の若年層において頻用される状況にあるのが、1 節でみたような否定的特立をあらわすとりたて詞ゲナである。実際の使用状況をみるためにウェブ上に挙げられた例を見てみよう。文脈などからみて、いずれも福岡方言話者によるものと思われる。

(11) ひろし：こげな所げな聞いとらんばい！（ひろし：こんな所なんて聞いてないよ！）
：「あなたにも使える博多弁講座」（http://www.ronax.net/hakata/lesson07.htm）

(12)　バス停なんかまだ小字名で残っているよね、笹山もそうだし。趣があってよいね、波多江駅北ゲナ無機質でなんか親近感沸かないですね。

：「福岡県糸島地方・前原市・志摩町・二丈町・について　其の十四」

（http://kyusyu.machi.to/bbs/read.pl?BBS=kyusyu&KEY=1129546983）

(13)　方言ばださんごとしゅーっちおもとっても 「来る」やら「が」ば「の」ていってから後で言い直したり日本語の不自由になるけん、あんまり方言ゲナしらんほうがよかっちゃよかつばぃ

：「博多弁を話したい！」（http://academy6.2ch.net/test/read.cgi/gengo/1076768994/）

ゲナのこのような用法は、１節で述べたとおり、すでに陣内(1993)『地方中核都市方言調査報告ー福岡市・北九州市ー』などで報告されているわけであるが、伝聞形式ゲナとの相違点をまとめると(14)のようになる。

(14)　「伝聞ゲナ」と「とりたて詞ゲナ」の用法のちがい

	構文的出現位置	文法的役割	文法的意味	共通語の該当表現
伝聞ゲナ	文末（述語の後）	助動詞	伝聞	～ダソウダ ～トイウコトダ
とりたて詞ゲナ	文中（述語の前）	とりたて詞	否定的特立	～ナンカ ～ナンテ

3.2.引用マーカーからとりたて詞へ

さて、3.1.で紹介した伝聞ゲナと、とりたて詞ゲナとはどのような関係にあるのだろうか。すでに松尾(2009)で結論づけたように、かつて九州地方で広く伝聞形式として用いられていたゲナが福岡方言においては(15)(16)のような引用マーカーとして用いられるようになり、そこからさらに用法を派生させてとりたて詞としてのゲナが生じたものと稿者は考えている。

(15)　あ～、会社辞めて世界一周旅行に行くゲナ、夢のある話やねぇ。（あ～、会社辞めて世界一周旅行に行くなんて、夢のある話だねぇ。）：坪内(2004)

(16)　「○○さんが私に仕事しろ」ゲナ言うとよ。（21 才女性・福津市、稿者アンケート[6]）

(15)(16)のようなゲナは、その場にいる相手や、その場にはいない第三者のそれまでの発言をそのまま、あるいは要約して取り出したことを、ゲナを用いて表現している。つまり、一種の「引用マーカー」としての機能を果たしている。

詳細は松尾(2009)に譲るが、とりたて詞ゲナは、このような引用マーカーとして用いられるゲナを仲

立ちとして伝聞のゲナから派生したと考えられるのである。この文法機能の変化は、(17)のように図式化できるであろう。このような変化が福岡方言において生じ、若年層話者がとりたて詞としてゲナを使用するという状況にあるものと思われる。

(17)　ゲナ（伝聞）　→　ゲナ（引用）　→　ゲナ（とりたて詞）

4.「ヤラ」と「ゲナ」の相違点

4. 1. とりたて詞の成立過程の相違

以上、福岡方言のヤラとゲナについて、共通語との関わりや両者の成立過程について考察を行ってきた。これを踏まえて両者の成立過程を考えたとき、ヤラとゲナには次のような相違点が見られる。

(18)　出自から見たとりたて詞のヤラとゲナ

「ヤラ」　（並列起源）　：並列　→　擬似的例示

ヤラの語彙的資源：疑問（不定）を表す「ヤラ＋ン」の複合形態

「ゲナ」　（引用起源）　：引用　→　否定的特立

ゲナの語彙的資源：伝聞を表す文末形式（さらに遡ると、様態を表す形式「ゲ＋ナリ」）

このように、ヤラは並列用法から、いっぽうゲナは引用用法から派生してとりたて詞的な性格を持つに至ったものと思われる。では、このことは両者の意味用法とどのように関わってくるのであろうか。

それは、「ヤラ：擬似的例示」と「ゲナ：否定的特立」という、両者の持つ中心的意味にある。

陣内（1993）で明らかとなったように、ヤラは良いものも悪いものもとりたてることができる。つまり、とりたてられる要素の評価的価値としては中立である、ということである。

それに対して、ゲナはもっぱら悪いものをとりたてる、否定的特立としての機能を持つ。この点について、稿者がおこなったアンケートの回答例を具体的に紹介しておきたい。以下、ゲナによって取りたてられる要素の評価性に関する福岡方言インフォーマントの回答を抜粋して(19)に示す。なお、この時の質問項目は、「まったくゲナを使わない人に対してあなたがゲナの用法を説明するとしたら、どのような用法だと説明しますか？」というものであった。

(19)　a.「ナンテ」に近い、マイナス的　（25 歳男性、福岡市）

b.「ゲナを使うときは、あまり良い意味ではない時によく使います」

（23 歳女性、大野城市）

c.「あるものについて、悪く言うときにゲナを使う…というか、さげすむものに対してゲナをつける気がします」　（22 歳女性、うきは市）

このように、とりたてゲナが否定的特立として用いられる、ということはこのアンケート結果からも見てとれる。ここであらためて、ヤラおよびゲナの中心的意味と、とりたて詞用法が成立する前段階の意味用法を整理したうえで、4.2 の考察に進みたい。

(20)　とりたて詞としての「ヤラ」と「ゲナ」・まとめ

	中心的意味	とりたて詞の前段階
ヤラ	擬似的例示	並列形式
ゲナ	否定的特立	引用マーカー

4. 2. 引用からの派生

4.1 で見たように、ゲナは引用形式からとりたて詞が派生したことが想定される。これと同じ方向性の変化をたどったものにノ・ダノによる並列形式がある。岩田(2012)では、ノ・ダノという形式が引用から派生した例示並列形式であることが明らかにされている。岩田によると、ノ・ダノ並列発生初期段階の室町期抄物や虎明本狂言、あるいはその後の江戸期資料においても(21)のような引用句の割合が高いことを根拠として、ノ・ダノ並列が引用句を基盤として発達したことが述べられている。

(21)　かさかけのこまくらべのと仰せられて、上々の御てうあひなさるゝ物で御ざるが
（虎明本狂言　牛馬）（岩田(2012)より引用。下線は稿者による）

この指摘は、本稿の考察対象であるゲナに深く関わる重要なものと考えられる。

じつは、共通語のノ・ダノ並列もまた、福岡方言のとりたて詞ゲナと同じく、その用法は否定的特立で用いられることが多い。グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』のダノ並列に関する記述を見てみよう[7]。

(22)　(4)　彼は、やれ給料が少ないだの休みが少ないだのと文句が多い。
(5)　彼はいつ会っても会社をやめて留学するだのなんだのと実現不可能なことばかり言っている。

「やら」「とか」のようにいくつかのものをあげる言い方だが、(4)(5)のように発言の内容を「いろいろ言ってうるさい」と否定的にとらえて使うことも多い。また(5)のように「…だのなんだの」という慣用的な表現もある。
（グループ・ジャマシイ編(1998) p.201、下線稿者。なお用例(1)〜(3)は省略した）

これは稿者の言語直観とも合致する記述であり、ダノ並列によって例示されるものは良くないものであるほうがしっくりくる。それはつまり、とりたて詞ゲナを使用する福岡方言インフォーマントがゲナ

によってとりたてられるものに対して「マイナス的」だと感じたり、「あまり良い意味ではない時によく使」ったり、「さげすむものに対して」使うという言語直観をもつのと同様である。

このように、引用から派生したと思われる共通語のノ・ダノ並列と、福岡方言のとりたて詞ゲナがともに否定的特立をその主たる意味として持つことは大変興味深い現象といえよう。

それに対して、引用からの派生ではない福岡方言のヤラが擬似的例示として良いものでも悪いものでもとりたてることができるという事実は、やはり「引用からの派生」ということと「否定的特立」とが何らかの結びつきを持っていることを示唆していると考えられる。

ただし、引用からの派生、ということがなぜ否定的特立として用いられやすいのかというその理由については当然考察を行うべき事柄であるが、現段階では明確な回答を用意できていない[8]。また、ノ・ダノは並列形式であり２つ以上の要素を要求するのに対し、ゲナは基本的に１つの要素のみをとりたてて用いられるという用法の相違もあり、ひとくくりに考えてよいかという疑問も残る。いずれの問題についても、別稿を期したいと思う。

5. まとめ

本稿では、福岡方言で用いられるとりたて詞ヤラとゲナの意味用法の相違が、それぞれの成立過程と関係していることを述べた。

ヤラ、ゲナともに、もと文末形式であったものが文中で用いられるとりたて詞となったという点においては共通の文法変化といってよい。ただし、ヤラは並列用法からの派生、ゲナは引用用法からの派生という、その成立過程の相違が、一方は「擬似的例示」、そしてもう一方は「否定的特立」という、とりたて方に関する意味用法の相違を生んだものと考えられる。

福岡方言におけるヤラとゲナは一見すると使用年層による形式対立にすぎないと思ってしまいがちだが、詳しく観察してみると意味用法においても相違点を持つのである。とくに、引用から派生したと考えられるゲナが否定的特立でもっぱら用いられるという事実は、ノ・ダノ並列など同じような過程を経て成立したほかの形式とも関係づけて考えるべき事柄であり、とりたて詞研究において単なる一方言形の記述にとどまらない可能性を秘めていることを提起しておきたい。

注

[1] 「否定的特立」の用語は金水・工藤・沼田(2000)に従う。
[2] アンケート結果の詳細については松尾(2009)pp.71-74 を参照いただきたい。
[3] 「否定的特立」と同じく「擬似的例示」の用語も金水・工藤・沼田(2000)に従う。
[4] たとえば、ナンカ、ナド、トカには次のような擬似的例示用法もある。
卒業旅行に行くんだったら、長崎｛ナンカ／ナド／トカ｝いいんじゃないかな？
[5] アンケートの詳細については松尾(2009) pp.71-74 を参照されたい。なお、1986 年の調査による『福岡県域言語地図』（図 26）でも福岡県方言における伝聞形式としてのゲナが調査されており、老年層では筑後、筑前、豊前南部域に伝聞形式として分布しているが、若年層においてはやや使用範囲が狭まり、筑前東部域などでは伝聞ゲナが見られないという結果が報告されている。
[6] 被験者の年齢はアンケート回答時（2008 年段階）のもの。以下同じ。
[7] 同書ではノ並列についても 464 ページに「同類のものを並べ上げて、あれやこれやとうるさく言う様子を表す。」と記されている。
[7] 引用と例示の関係については岩田(2007b), (2012)などでも論じられているが、なぜ引用から派生したものが否定的特立で用いられることが多いのかという観点からの考察は加えられていないようである。

〔参考文献〕

岩田美穂(2007a)「例示を表す並列形式の歴史的変化－タリ・ナリをめぐって－」『日本語の構造変化と文法化』pp.93-113　ひつじ書房

－－－－(2007b)「「ノ・ダノ」並列の変遷－例示並列形式としての位置づけについて－」『語文』89、pp.48-58

－－－－(2011)「ヤラにおける例示用法の成立」『日本語文法』11-2、pp.60-76

－－－－(2012)「引用句派生の例示」『日本語文法史研究』1、pp.145-163

岡野信子編(1987)『福岡県域言語地図』梅光女学院大学方言研究会

九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究　改訂版』風間書房

金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店

グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図１』大蔵省印刷局

陣内正敬(1993)『地方中核都市方言調査報告－福岡市・北九州市－』九州大学言語文化部日本語科

坪内佐智世(2004)「「伝聞」の「そうだ」とそれに対応する福岡市博多方言の伝聞形式」『福岡教育大学紀要』53-1、pp.41-50

松尾弘徳(2009) 「新方言としてのとりたて詞ゲナの成立－福岡方言における文法変化の一事例－」『語文研究』107、pp.61～77

〔付記〕

本稿は、第 222 回筑紫日本語研究会での口頭発表を基に加筆・修正したものである。発表の席上、多くの有益なご教示を賜った。また、本稿に関わる方言アンケート調査にご協力下さったインフォーマントの方々には深く感謝申し上げる。

なお、本稿は平成 24 年度科学研究費補助金（若手研究 B）による研究成果の一部である。

（まつお ひろのり・鹿児島国際大学国際文化学部講師）